学道一如

発行
小樽双葉高校
新聞部
2026年10月20日
第38号

第二回学校説明会 80名の中学生が授業・部活を体験

10月3日、本校の教育内容、魅力を知ってもらおうと中学生と保護者を対象に第二回学校説明会が開催された。中学生約80名と保護者が来校し、体育館で全体説明を聞き、ドリプロ、部活動を体験した。

吹奏楽部演奏で歓迎

オープニングは吹奏楽部による演奏「スターウォーズ」で始まり、吹奏楽部の体験を期待している中学生の期待を高めた。（左写真）



部活動、留学、英検アピール

校長先生は挨拶の中で、本校は強化指定部の活動に加え、留学、クルーズ船観光案内、英検受験指導に力を入れていると語った。

次に北村先生が本校の歴史、宗門校であること、コース、学校行事、進路、ドリプロについて説明された。

後藤先生からは留学プログラムのお話があり、この夏にハワイに短期留学した中村美月さんが貴重な異文化体験を報告した。

バレー部、バドミントン部、写真部が活動紹介

部活動の紹介では、強化指定部とその他の運動部、文化部の紹介があり、その後、バレー部、バドミントン部、写真部の代表が各活動を紹介した。特に写真部はスローシャッターの撮影をストロボを使い実演して見せた。

入試制度、奨学金の話

野月先生からは入試制度、奨学金、留学費用負担の話があった。入試には専願入試、強化指定部推薦入試、一般入試の三つがある。授業料は国の施策により昨年から私学も無償になっている。修学支援制度、各種奨学金、チャレンジ奨学生についても触れた。

卒業生からのビデオメッセージ「挑戦を応援してくれる学校」

今春卒業して大学に進学した2名の卒業生からのビデオメッセージが披露された。

小野陽登くん（同志社大学）は特進クラスに在籍し、生徒会長を務め、英検準一級にも合格した。本校は生徒の挑戦をしっかりサポートしてくれることを明快に語っていた。

菅原陸斗くん（室蘭工業大学）は吹奏楽部で活躍しながら、理数の強みを活かして、希望校に合格した。部活動に集中しながらも進路の手厚いサポートのおかげで進学できたと語った。

ドリプロ体験6コース

「発想力アップ」ビジネス専攻



「カードゲームでアイディア創造！ビジネス発想力アップ講座」課題を見つけ、リソースを使って解決する方法を体験した。

「地域の砂を解析」サイエンス専攻



石狩、銭函の砂をふるいにかけて、顕微鏡で観察した。

クイズで異文化理解 グローバルカルチャー専攻



各国の文化の違いをクイズ方式で解答。ﾏｯｹﾝﾃｨ先生が英語で出題した。

「正しい手洗いとは」医療福祉専攻



正しい手洗いの仕方を身に付ければ、感染症を防ぐことができる。実際に手を洗って、どれだけ菌が付着しているのかを確かめた。

心理的競技能力を診断 スポーツアスリート専攻



前半は心理的競技能力診断検査を実施して各自分析した。後半は床に輪を並べて跳ぶ、コーディネーショントレーニングを体験した。

「自分の健康は自分で作ろう」フード専攻



市販のお菓子に一手間加えて、試食。その後、長谷川由紀子先生から正しい食習慣を身に付け健康管理する重要性を教わった。

最後は各部活動と特進の授業を体験して、説明会を終えた。個別相談や制服試着体験コーナーも設けられた。

参加者の満足度高い わかりやすい説明、体験型好評

全体会は68％が満足、28％がやや満足との結果。感想も提示する。

▼進路の幅が広がったのとビジネス専攻での活動を得てアイデアをたくさん出す大切さや自分の持ってる能力などでどんなことが出来るか考えることができて楽しかったです。▼スライドで色々な事を初めて知って、医療福祉の体験でどれだけ自分の手が汚れているかを知れて楽しかった。▼生徒が部活や留学についてスライドを作って紹介していて、良い印象をもった。▼様々な進路実績の説明と、グローバル専攻での活動の説明が詳しくて良かったです。クイズで世界の文化が学べてとても楽しかったです。留学についてもっとたくさんのことを知りたいと思いました。

全道新聞研究大会 in 函館

大会テーマ　史実は導、進化は歩～史帆漸進～

10月7日～9日、函館市で第70回全道高等学校新聞研究大会が開催され、新聞部員4名が参加した。右記の大会テーマの下、歴史に学び、新聞を作る全道の仲間との交流を通じて、それぞれに学びを持ち帰ることができた。

はこだて―変革し続ける街―　奥平　理 氏

記念講演には観光学がご専門で生粋の函館人である奥平理氏（北海道教育大学函館校　准教授）が登壇し、函館の歴史、青函連絡船、文化、景観について語られた。

奥平先生はＮＨＫブラタモリで二度案内人を務めたことがあるという。



河野政通によって1454年に築かれた城（宇須岸館、上写真地図）が箱形で、函館の地名の由来と言われている。

Ⅰ　歴史

黎明期は中世に遡り、アイヌ民族の居住地に和人が左地図のように箱形（→箱館→箱館）の城を作ったと伝えられる。

やがて、**江戸幕府の直轄地**となり、奉行所が設置され、高田屋嘉兵衛らが活躍し、**北前船**の寄港地として発展する。



江戸時代末期、**戊辰戦争終結の地**となり、**五稜郭**（日本最古の洋式城郭、星形、武田斐三郎設計、上写真）、四稜郭（土塁跡）などが史跡となった。

その後、**北海道開拓使**が設置されるが、二年で札幌に移転し、箱館は出張所となった。だが、街は**造船都市**として発展し、人口が急増する。函館ドック、青函連絡船、（株）日露漁業（現・マルハニチロ）が設立され、一九三五年までは東京以北の最大都市であった。



函館全盛期の歴史的建造物として①太刀川家店舗（関西風商家、和洋折衷、耐火建築、上写真）②旧金森洋物店③旧函館区公会堂④ハリストス正教会（いずれも重要文化財）がある。

また、函館は**北洋漁業**の拠点としてカニ、サケ、マスの船団が出航、水産加工も盛んだった。

海外の文化交流を物語る建物として、二つの修道院、中華会館を挙げ、市の歴史的景観として、函館市電、和洋折衷建築、西部地区の街並みを紹介した。



中華会館
1910年「日本最古の関帝廟」内部の装飾品はすべて清国から取り寄せたもの。華僑の繁栄を伝える。



古稀庵
函館式上下和洋折衷様式建築物。２階上部は洋風の外装、屋根は和風瓦、１階と２階の間に胴蛇腹がある。２階内部は実は畳敷き。



西部地区　八幡坂

一九三四年、**函館大火**で市街地の３分の１を焼失、死者行方不明者二千七百人に及ぶ。歴史的遺産の損失も甚大であった。これを教訓に耐火建築の学校、防火帯（グリーンベルト）を作った。

第二次世界大戦では陸上よりも**青函連絡船**や貨物船の被害が大きく、死者は四二五人に上る。

戦後は港湾機能の喪失に伴い、①北洋漁業の衰退　②石油危機後の造船不況　③フェリーターミナル移転　④青函連絡船廃止の影響により、函館は**斜陽化**する。（歴史的建造物は残った。）

一九八八年、ウォーターフロント（赤れんが倉庫群）再開発により、新たな港湾機能を創出。函館は**国際観光都市として再生**する。二〇一六年には北海道新幹線新函館北斗駅が開業し、本州との距離が縮まった。昨年の観光客は六〇六万人に上る。

２　青函連絡船

一九〇八年から80年間、青森と函館を結ぶ鉄道連絡船が就航していた。所要時間は4～5時間。この時期は北海道の開拓事業が本格化していた時期で、船に直接貨車を積み込む車両航送により、たくさんの物資が運ばれた。

昭和20年7月、8月、米軍の空襲により、青函連絡船はほぼ全滅した。

昭和29年、台風15号により洞爺丸と貨物船４隻が沈没し、一四三〇人が犠牲となった（世界の海難史上二番目の記録）。

沈没の原因は車両積込部（船尾）の構造が開放型であり、波が侵入したためだった。これを教訓に船は閉鎖型の船尾に改良された。

一九七〇年代前半、貨物、旅客のピークを迎えたが、一九八八年青函トンネル開通に伴い、役割を終えた。最盛期は13隻で1日30往復していた。

現在は函館港に摩周丸が博物館船として係留されている。

３　文化

お祭りに古今東西文化の影響が見られる。たとえば、七夕を7月7日に行い、津軽藩の「ろうそくもらい」をする。

風俗では、葬儀でまず遺体を火葬して通夜、葬儀を行う。

衣食住は先取の気質に富み、ハイカラを好む。

函館弁を紹介した。①バガ→はんかくせ→ほんずね　②がっつし→のっつし→わっつし　③なまらわやだ　④手袋ばはぐ　⑤ごみばなげる

４　今後に向けて

製造業から観光業へと変革を続けている函館。道内で中世以降の歴史・文化を持つ貴重な地域である。恵まれた観光資源を有効に活用したい。新幹線開業により、本州との交流が活発になり、経済圏も変化してきた。発想の転換が急務である。東北地域との繋がりを深め、国内観光客を取り込むことも重要である。

函館市青函連絡船記念館

摩周丸



函館三大展望台の一つ（摩周丸の甲板に立てば、西部地区から駒ヶ岳、トラピスト修道院が麓にある丸山まで360度見渡せる。函館駅から徒歩４分）

摩周丸は一九六四年から続々とつくられた津軽丸型連絡船（高速自動化船）７隻のうちのひとつで、一九六五年六月に就航し、一九八八年三月の青函連絡船最後の日まで走った。連絡船廃止後、母港函館に保存されることになり、現在、博物館として乗船することができる。

実物に触れて歴史を伝承

操舵室（船橋）、無線通信室はそのまま保存されており、見学できる。また、船室の一部は改装して、実物部品や模型などを展示しており、パネルや映像により、連絡船の歴史やしくみを知ることができる。

ⅡC分科会のメンバーは摩周丸を取材し、班ごとに新聞を製作した。38年間、費用をかけて船を維持し、多くの人に足を運んでもらう意義が浮かび上がった。

取材では函館空襲や洞爺丸台風などの歴史、車両航走システムや船の安全性向上、自動化などを記念館のスタッフに聞いた。

洞爺丸事故を教訓に

一九五四年に台風により起きた洞爺丸事故。史上二番目の海難事故とされ、その教訓から摩周丸は生まれている。船尾は開放型から閉鎖型に改良され、波の侵入を防いだ。さらに航行の自動化、現在位置測定システム、衝突回避システムなどが導入され、安全性に配慮されていた。また、救命具の質の向上、や救命ボートの改良（手動→自動）がなされ、その甲斐あって、摩周丸は死傷事故なくその役割を終えた。

分科会講師の小林哲也先生は実際にモールス信号に触れ、操舵室で舵取りの体験ができることから「本物を見ると違うと思った」と語った。

新聞全道大会 分科会報告



展示新聞の前で

ⅠB分科会　高校生新聞をどのように作るか（企画・取材を考える）

企画書作りを楽しんだ

各校でどのように企画を立て、取材内容を決めているのか。各自レジュメを作り、意見を交換し合いました。

ずっと3人の班でグループワークでしたが、一緒に企画書を作るのは楽しかったです。札幌開成の生徒が編集長になり、企画書を考えたときのアドバイスをいただきました。

今後の活動に活かします。

（1-2菊地羽菜）



ⅡB1分科会　よりよい新聞を作るために（取材して記事を書こ

新聞作りの基礎と実践を

元記者の渡辺多美江さんを講師に迎え、取材の基本と写真撮影を学び（下写真）、模擬共同記者会見を行い、班ごとに人物紹介記事を作成しました。記者会見には函館の歴史的風土を守る会の櫻井拓郎氏を招きました。

班のメンバーは真面目で優しく教えてくれ、力を借りて紙面にできました。新聞の作り方を基礎から学べて良い経験になりました。

（1-2阿部優里愛）



Ⅲ分科会　校内生活・社会生活について考えよう

AIは道具、サポート役

今回はICTツールの利用やAIとの付き合い方について、各自レジュメを作り、新聞を持ち寄り、討議しました。

主に校内生活におけるICTツールの利用、社会生活におけるAIの影響について、意見を交わしました。

最初は緊張していましたが、班のメンバーは優しく、安心して自分の意見を伝えることが出来ました。ChatGPTとGeminiを比較し、真実の見極めが大事だと感じました。新しい考え方を知る良い機会となりました。

ICTを使う際に嘘かどうかを見極める判断力や本当にAIに情報を教えて良いのか、情報が漏洩するかもしれない恐れを踏まえた上での使い方、自制心が必要であり、最終手段やAIはあくまで勉強などのサポートや道具であることを確認しました。（1-3　木藤心音）

Ⅳ分科会　支部活動を活発にするために



全体会で報告

各支部・学校の活動内容を報告し、日頃の悩みから支部活動、全道大会の在り方まで意見を交換しました。

一つ目は課題と解決方法。局員・部員不足が課題となっており、勧誘方法を出し合いました。柔らかい印象を持ってもらう、活動体験で満足度を上げる、生徒の交流時間を増やす、SNSで活動を発信する、支部でもSNSの活用をとの声がありました。



次に支部を超えたオンライン交流会が札幌開成主催で2回開催されたことを振り返り、生徒に開催の情報が届いていなかったことが明らかになりました。今後もこの取り組みの継続、発展が期待されます。（落合優翔）